

# 新島襄が初めて読んだ漢訳聖書抜粋 『真理易知』について

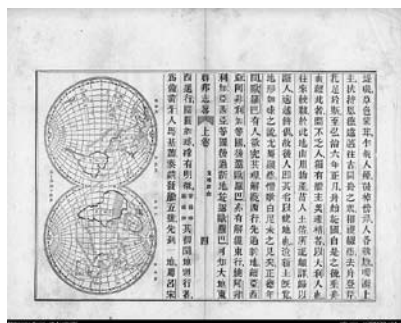
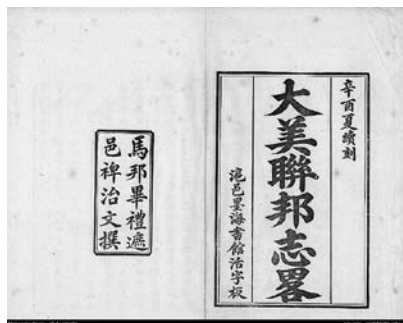
布施田 哲 也

## 1. はじめに

新島襄（当時 新島七五三太）は、1864年鎖国中の日本から国禁を犯し函館より単身密航出国している。自由と文明にあこがれておこした無謀ともおもえる1青年の行動は、いろんな出会いにめぐまれ後年アメリカ・日本で実を結ぶことになる。

新島襄が国外に眼を向け始めたきっかけは、江戸湾でのオランダ軍艦との出会い、日本語訳の『ロビンソンクルーソー物語』、ブリッジマンの『連邦志略』、とならんで、1冊の漢訳聖書抜粋との出会いがあげられている。1861年発行のブリッジマンの『連邦志略』には下図に示すように正確な世界地図がのせられており、また海外に眼を向けさせるさまざまな図があり国外への想いはおのずと広がったものと考えられる。<sup>1)</sup>

私はリウマチズムの治療法の時代的変遷への興味から、新島襄を長年苦しめたりウマチズムを通して彼の生涯をふり返る機会を得た。<sup>2)</sup> 新島襄の



人生で感銘深い出来事は聖書との出会い、「天父」の発見、「見えざる手 Unseen hand」に導かれた奇跡的ともいえる出会いにあると思っている。しかしながら人生の方向を決めるきっかけとなった1冊の漢訳聖書抜粋とは実際どのようなものであったのかをきちんと考証している研究はいまだ見ていない。今回当時の出版流通状況、国内外の史料等を詳細にみなおすことにより新島襄が初めて手にした漢訳聖書抜粋は『真理易知』(Easy Introduction to Christian Doctrine)であったと同定できると考えるので報告する。

## 2. 彼が初めて聖書を手にした当時の日本の状況

『新島襄全集8巻(年譜編)』によれば、「文久三年(1863年)21歳、友人から中国語の本を貸してもらう。その中には漢訳聖書のほか、ブリッジマン(裨治文Elijah C.Bridgman)の「連邦志略」や、ウィリアムソン(Williamson)の雑誌が含まれていた。」と記されている。この年譜の記載は、A.S.Hardy著『*Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*』(1891年)を基にしている。これは、前年の玉島紀行のあと、翌年の函館行きの間の期間であった1863年ごろと考えるのが妥当とされている。

当時の日本では、1857年に日米修好通商条約が締結されて、翌年1858年には横浜が開港となり、プロテスタント諸教派の宣教師たちが次々に来日した。

1859年5月にはアメリカ聖公会のリギンス(John Liggins)が、6月には聖公会のウィリアムズ(Channing M.Williams)が相次いで長崎に来日した。10月にアメリカ長老教会のJ. C. ヘボン(J. C. Hepburn)夫妻、11月にオランダ改革派教会のS. R. ブラウン(S. R. Brown)とシモンズ(D. B. Simmons)が横浜に、長崎にはオランダ改革派のフルベッキ(G. H. F. Verbeck)が来日している。

開国したものの幕府内では未だ攘夷の勢力やキリスト教を禁制する力は強く、禁教が解かれる見込は全くなかった。しかしながら一旦鎖国が破れ、長崎以外での開港もはじまると、長崎での会所貿易はなくなり自由貿

易状態となり、かつては禁書政策の中心となっていた船来図書検閲制度が機能しなくなった。その結果、来日した宣教師の多くは、すでに中国での伝道経験を生かし、中国で普及配付していた漢訳のキリスト教関連書籍特に伝道用小冊子（Tract トラクト）を長崎や横浜を経由してひそかに入手していたのであった。

### 3. 聖書を手にとること

新島襄は、17、18歳のころ、中国の古典を熱心に学んでいる途中で、実はキリスト教に関する中国書籍を手に入れているようだ。

「十七八年ノ比ヨリ窃カニ基督教ニ関スル支那ノ書類ヲ得ミ大ニ心ヲ養フ所カアリマシテ、」と述べている。<sup>3)</sup>

新島襄が渡米時個人的にも大変世話になったアンドーヴァー神学校日曜学校の教師 McKeen 女史は、1890年 *Upright against God* という新島襄の青年時代という小冊子をまとめている。その本の中で次のことを記載している。<sup>4)</sup>

“There were, at that time, three crimes in Japan for which crucifixion was the penalty; the murder of a master by a servant, a parent by his child, or the reading of the Bible!”

（1863年当時の日本では、磔の刑となるものは3つありました。それは、家来が主人を殺したとき、子が親を殺したときそして聖書を読んだときでした。）

以上のような状況にあったにもかかわらず向学の想いを押さえかねていた新島襄は、杉田廉卿、吉田賢輔、津田仙らと共に聖書の会を開いていたようである。<sup>5)</sup>

### 4. 流布していた漢籍書籍

新島襄が漢訳聖書抜粋を手にしたとされる1863年当時、どのような漢訳のキリスト教関連書籍が幕府の目を逃れ日本国内に入ってきたのであろう

か？

『幕末明治耶蘇教史研究』、『明治仏教全集（第八巻護法編）』に詳しい資料がある。<sup>6)7)</sup>

香山院龍温の『闢邪護法策』（1863年）によると次の記載がある。「爾ルニ昨年在府中ニ重テ命ヲ蒙リ搜索セル処。可恐事ハ彼等ガ聖經ト称ルモノヲ始メ其外数部密行セルモノヲエタリ。其外「聖經類書」「天道鏡要」「天道溯源」「喻道伝」「初学編」等モ手ニ入りシ」

伏水の『斥耶蘇』（1864年）の冒頭部分には次のように書かれている。「一人アリ関東ヨリ二書ヲ寄来ルーハ耶蘇教要旨ト名ケーハ真理易知ト名ク披テ之ヲ閱スレハ所謂ル耶蘇ニ奉スル者也始テソノ宗義ノ大義ヲ知コトヲ得タリ按ニ世教ノ大害コレヨリ甚シキハナシ黙止スルコトヲエス直ニ破斥ヲ加ヘ一書ヲ作テ同志ニ示ス」 関東から『耶蘇教要旨』と『真理易知』という書がまわってきたと書いている。

また安休寺晃曜の『護法総論』（1869年）によれば、慶応乙丑年（1865年）当時には、計96種類もの漢籍耶蘇教書関連書籍が長崎に渡ってきていることがわかっている。

## 5. 漢文での文書伝道

来日する宣教師たちは、中国での伝道の経験を踏まえて次のような立場で日本での布教の足がかりを作ろうとしていたようである。漢籍の素養がある階級では、海外の知識吸収に貪欲であり、中国で使用した西洋の科学技術の紹介本が有力な西洋理解・伝道的手段になること、道端での説教・講話は厳しく禁止されていたため文書伝道が有効であると考えていた。また医療施術を中心とした慈善事業をしたり、英語を教えながら布教をおこなったりすることも有効とかがえていた。

1860年10月18日のヘボンの書簡の中に以下の文面がある。

「一般の人たちの間には何の伝道の仕事も直接試みてはおりません。中国語の新約聖書を数冊と、同じ言葉の宗教的な小冊子を配っております。漢

字で印刷された書物を読める人々の割合は、とても小さいものです。」

1860年12月26日の書簡より「中国に住んでいるわれわれの宣教師仲間のものが中国人のために編集した書物をわたしどもの間に持ってきてくれました。(略) これらの書物の大部分はマカルティー師またはネビアス師の出版したもので中国の戦争の報道、外国からのニュース、その他教会史でありました。」<sup>8)</sup>

宣教師ブラウンも、1860年12月31日横浜で書いた書簡に同様の記載がある。「最近、中国から来たひとりの宣教師が、数週間ここに滞在中、数百冊の漢文のキリスト教の書籍を配布しました。たぶん、大小とりませ、ほとんど1000冊をこの近郷の村にくばりました。」<sup>9)</sup>

この宣教師は、香港からアメリカ経由で英国に戻る際に1860年4月9日より6月17日まで日本に立ち寄った英国国教会のジョージスミス (George Smith) で、このときの日本滞在記は『*Ten Weeks in Japan*』として出版されている。その中でも以下のように述べられている。

「役人は日本語で訳された書物を、偏見をもって見るのとは違って、漢籍の場合は色めがねで見なかったので、おそらく漢訳の聖書や中国語で書かれた小冊子や書物は、ここしばらく、日本人に宗教上の真理をつたえるのに役立つ、唯一の伝達手段となることでしょう。教養のある日本人ならだれでも、漢字を読むことができるのです。」<sup>10)</sup>

文書伝道は、きわめて有効であり中国の宣教師は、漢字の印刷に19世紀はじめより積極的にのりだしている。1842年の南京条約後の中国伝道開始後に、中国本土に印刷所を構えることとなり、アメリカ長老会は出版・印刷機構である美華書館を作った。美華書館は、1844年澳門（マカオ）に翌年に寧波に移転し、1860年には上海に移転している。

アメリカ長老会の機関紙『*Missionary Magazine*』によれば、中国語の宗教関連書物や伝道小冊子は1859年の時点で延べ600万部が印刷され中国国内で流通していると報告されている。<sup>11)</sup>

## 6. 新島襄が手にした漢訳聖書抜粋についての記載（英文）

漢訳聖書との出会いについての英文史料を時系列で6つ提示する。

最初は、1865年10月ボストンでハーディー夫妻に提出した手記 “Why I departed from Japan” である。渡米を志した動機を綴っている。その中で聖書との出会いは以下の記述である。

I found out small Holly Bible in his library that was written by some American minister with Chinese Language, and had shown only the most remarkable events of it.

（彼の書齋で聖書を抜粋した小冊子を見つけた。それはあるアメリカの宣教師が漢文で書いたもので、聖書の中のもっとも重要な出来事だけが記してあった。）<sup>12)</sup>

2つ目は、アメリカンボードの機関紙『*Missionary Herald*』（1866年10月号）に聖書や伝道なしでも回心が起こる異教徒の例として新島が紹介されている。<sup>13)</sup>

この演説は、1866年5月ニューヨークで開催された American Bible Society の第50回記念式典の中で、当時アメリカンボード海外伝道担当幹事の Rufus Anderson の講演の中で以下のように述べられた。

It was that of a young man at Yeddo, the capital of Japan, who seems never to have come in contact with a Christian missionary. This young Japanese somehow acquired a longing for foreign knowledge. His first book was an atlas of the United States, in the Chinese language, prepared by an American missionary, and he thus became greatly interested to know more of the institutions of our country. One day, while examining the library of a friend, he found a small Chinese Bible, which he borrowed. He at once cordially received the Scripture account

of creation, and of the coming of the Son of God into our world, as the Saviour of men. He then resolved, if possible, to get possession of a Bible in the English language, and began the study of that language with a Japanese teacher, and his prayer to the God of the Bible was, that he might go where that language was spoken. Breaking away at length from the paternal home, on the plea that he belonged to the Heavenly Father and must believe Him, he got on board an American ship, bound to Boston, and came to that port. His prayer, on his arrival, as he has stated it, was in these words: "O God, if thou have got eyes, please look upon me. O God, if thou have got ears, please hear me. I long to read the Bible, and to be civilized by the Bible."

(大意 江戸に住む日本の1青年は、以前より西洋へのあこがれがありました。彼の目にとまった最初の本はアメリカの宣教師が漢語で書いたアメリカの地理書でした。アメリカの多くの制度に彼は大変興味を持つようになりました。ある日、友人の書齋で小さな漢訳聖書を見つけ読んで、この世界の救世主として、また創造主としての神というものの存在をすんなりと受け入れることができました。彼は英語で聖書を読みたいと思い、日本の先生と英語の勉強も始めました。また英語が話されている国へ実際にいきたいものだと思いはじめました。その思いは高じ、天父としての神の存在を信じて、ついに故郷を捨てアメリカの船に乗ってボストンまで来たのです。港に到着したとき彼は次のように祈りました。「神よ、もし目があるならば、どうか私を見出してください。耳があるのなら、どうか私の話を聞いてください。私は聖書を読みたい、聖書の教義を極めたいと思い続けてここにきたのです。」)

3つ目はアーモスト大学寄宿舎にて同室だったホランドが自宅に出した手紙がホランド文書の中に残されており、次のように新島の聖書との最初の出会いを手紙に書いている。(1868年10月3日)

While reading some Chinese books he came across one new to him

entirely. The first verse said “In the beginning God created the heavens & the earth.” “God?” — This was different from anything which Confucius taught, — this seemed positive, this seemed to be the source of certain information on points concerning which he had often been in doubt. And as he read on the conviction grew within him that here was truth. But one verse there was above all others in the wonderful book which seemed the best of all, & it told how this same “*God* so loved the world that he gave his only begotten Son, that whosoever believeth in him should not perish, but have everlasting life.” Here then was *hope*. Renouncing his idols he resolved to come to America although the penalty for leaving the country without the royal permission was at that time death. To be a Christian is at the present day a capital crime.

(何冊かの中国の書籍を読むうちに、彼はまったく新しい一冊に出会いました。第一番目の文章は「はじめに神は天と地とを創造された」でした。「神とは何か？」これこそ孔子の教えとはまったく異なる何ものかでした。これはプラスのものに思えたのです。これは彼がしばしば疑問に抱いてきた点について、何らかの解決のカギを与えてくれるかもしれない。なおも読み進むにつれて、ここに真理がある、という確信が内に湧いてきました。しかしながら、このすばらしい書物の中でも、なかんずく他のすべてにまさって最良と思えるつぎの一節が目にとまりました。すなはち、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」ここにこそ希望があったのです。彼は偶像を捨て去って、アメリカに来る決意をしました。ただし、当時としては国禁を犯して出国することは死に値する罪であったのです。今日でもなおクリスチャンになることは死刑に相当する犯罪なのです。)<sup>14)</sup>

4つ目は『*The Missionary Herald*』（1874年12月号）で まもなく日本に帰国する新島襄の記事の中で、1874年9月24日ボストンMount Vernon



教会で開かれたにシーリー教授の説教の文章を要約し伝えており以下の記述がある。<sup>15)</sup>

A Japanese friend, having met a little book called the “Story of the Bible” written in Chinese, by an American or English missionary, brought the book to the young man, as a strange story which he wished him to read.

(アメリカカイギリスの宣教師が漢文で書いた聖書物語と呼ばれた小冊子を日本の友人が持ってきてくれました。そこには彼にとって興味深い物語が書かれていました。)

5つ目は、1875年刊の『*David, King of Israel*』の中で、アメリカンボードの会員から作者が聞いた話として、新島のエピソードがでてくる。<sup>16)</sup>

A friend lent him an American Common School Geography in the Chinese language and a Chinese Bible, and these two books opened up a new world to him. He described what he felt on reading the first verse of Genesis, which unfolded to him an entirely new view of things, and then he went on to tell how the desire to know Western civilization and Christianity took possession of his soul. His first prayer was, “O God, if thou have eyes, look for me. O God, if thou have ears, hear me. I want to know Bible. I want to be civilized with Bible.”

(その友人は、中国語で書かれたアメリカの小学校で使う地理書と漢訳聖書を貸してくれました。その2冊が彼に全く新しい世界を示したのです。彼は創世記の最初の文を読んで直ちに理解することができました。これは彼にとって全く新しい見方であり、西洋文明とキリスト教をもっと知りたいという気持ちが強くなっていったのです。彼ははじめて祈りました。「神よ、もし目があるならば、どうか私を見出してください。耳があるのなら、どうか私の話を聞いてください。私は聖書を読みたい、聖書の教義を極めたいのです。」)

6 つ目は、“Why I departed from Japan” から20年後の1885年にハーディー夫妻に献呈された“My Younger Days”では、以下の記述となっている。

what excited most my curiosity were a few Christian books, published either at Shanghai or Hongkong. I read them with close attention. I was partly a skeptic, and partly struck with reverential awe. I became acquainted with the name of the Creator through those Dutch books I studied before, but it never came home so dear to my heart as when I read the simple story of God's creation of the universe on those pages of a brief Chinese Bible History. I found out that the world we live upon was created by his unseen hand, and not by a mere chance. I discovered in the same History his other name was the 'Heavenly Father,' which created in me more reverence towards Him, because I thought He was more to me than a mere Creator of the world.

(私の好奇心をもっとも刺激したのは、上海か香港で発行されたキリスト教に関する二、三の書物であった。私はそれらの書物を夢中になって読んだ。疑う気持ちが起きた反面、畏敬の念に打たれもした。以前に勉強したオランダ語の本を通じて、「創造主」という名称は知ってはいたが、漢文で簡潔に書かれた、聖書にもとづく歴史書で神による宇宙の創造という短い物語を読んだときほど創造主が身近かなものとして私の心に迫ってきたことはなかった。私は、私たちが住んでいるこの世界が神の見えざるみ手により創造されたのであって、単なる偶然によるものでないことを知った。)<sup>12)</sup>

なお2番目、5番目の最後に出てくる彼の祈祷文の原形は、実物が新島襄遺品庫に残っており原文はこうである。

“O God! If thou have got eyes, please! look upon me. O God! If thou have got ears, please! hear for me. I wish heartily to read Bible, and I wish to be civilized with Bible.”<sup>17)</sup>

ハーディー氏からアメリカに來た理由、将来の希望等を文章で提出する

ように言われボストンの海員ホームにいて “Why I departed from Japan” を書いている最中に記されたものとされている。

## 7. 新島襄が手にした漢訳聖書抜粋についての伝記・評伝における記載（国内）

日本での新島襄に関する伝記の発刊は、死後伝記が相次いで発刊された海外からくらべると大きく遅れ、1923年根岸橘三郎著の『新島襄』が最初である。

新島襄が最初に手にした漢訳聖書については記載しているものが多く以下、聖書との初めての出会いは日本ではどのように記載されているか年代順に下表にまとめた。

題名	著者	発刊年	ページ	該当箇所
新島先生言行録	石塚正治	1891	p.51	一冊の支那訳聖書あり、其始めに「元始時神創造天地」との1句を読む
偉人の青年時代	小河内 緑	1908	p.138	上海及び香港にて発見せる基督教に関する書籍 天父の存在を知り、過去二十年間に於ける幾多の疑問 漸次に明瞭となるに至りぬ。
新島襄言行録	永代静雄	1909	p.4	上海及び香港にて発見せる基督教上の書籍なりき 突に1巻の漢訳聖書抜粋なり 天父の存在を知り、
偉人と言行	高橋淡水	1910	p.277	後又、漢訳聖書を読み、造化の深意、基督の博愛に想到
明治代表人物	高須梅溪	1913	p.334	1巻の漢訳聖書抜粋は、彼の一生を支配することとなった。
思ふがままに	山路 愛山	1914	p.153	其書案に一聖書抜粋の在るを発見したり。これ某米国牧師によりて漢字を以て訳され聖書中の最も重要な事実のみを掲載せるものなりき。
新島襄	根岸橘三郎	1923	p.9	安中藩は新たにかかえた儒者 山田飛によって新思想の脈絡が付きました。(略)この際、漢訳の聖書が荷詰めとなって来たのだそうで、これが近藤等の関係ある人々には何時とはなく分与されたものであります。
新島襄傳	湯淺興三	1936	p.93	該中最も予の好奇心を高めたものは、上海及び香港に於いて発行せる基督教に関する書類なりき
新島襄の生涯	神田 哲雄	1956	p.48	わけても上海と香港において発行された漢訳の聖書抜粋は七五三太の若い心をつよくうつものがあつた。
新島襄	渡辺 実	1959	p.33	中でも彼の好奇心を最もそそったものは、上海及び香港で発行されたキリスト教に関する書籍であつた。
新島襄	和田 洋一	1973	p.67	聖書の部分訳なども混じっていた。香港あるいは上海で印刷され キリシタン禁制の日本に 秘密のルートを保つて流れ込んだもの

前節の英文史料はいずれも一次史料級といえるものであるが、日本語の伝記・評伝は主としてハーディーならびにデービスが書いた伝記を参照している。直接新島襄から聞いた話ではなく、先行伝記等よりの引用がほとんどで二次史料と思われる。

新島襄が初めて手にした漢訳聖書抜粋の特徴には以下の点が挙げられるようだ。その本は、1) 香港か上海から発行された聖書の中のいくつかの印象的な場面を載せた小冊子であること 2) 最初が天地創造からはじまっていること 3) また天父の発見もこの聖書抜粋を通じてと考えられること 4) ホランドの手紙によれば、その書物には、ヨハネ伝の3章16節がでてくことなどがわかる。

当時の日本に持ち込まれたと考えられている漢籍伝道小冊子を概観したところ、当時普及しており上の条件にほぼ当てはまる書物は Divie Bethune McCartee の『真理易知』(Easy Introduction to Christian Doctrine) と考えられた。<sup>18, 19)</sup>

## 8. Divie Bethune McCartee (麦嘉締 マカルティー) について

1820年フィラデルフィア生まれのアメリカの宣教師である。1840年ペンシルバニア大学医学部卒業1844年より中国寧波で宣教活動をおこない、多くの中国語著作、特に基礎的で平易な教義解説書や聖書の注釈書をあらわす。1861年12月より1862年4月まで日本を休暇で訪れており、旧知のブラウン夫妻と過ごし、ヘボン夫妻やフルベッキ夫妻とも面識を得ている。フルベッキの推薦で明治5年(1872)来日した。東京大学の前身第一番中学で英語を教えたこともある。

著作には『真理易知』『耶蘇教要旨』『耶蘇教例言』等々。<sup>20)</sup> マカルティーは数々の漢訳布教書を刊行しているが、特にこの『真理易知』は好評で版を重ねている。また、横浜に来ていたヘボンは、この本の和訳を試みており日本語版の『真理易知』も後年多数出回っている。中国での『真理易知』の印刷状況は、Presbyterian Church in the U.S.A.

Board of Foreign Missionsが発行しているAnnual reportで報告されている。

1854年の年報によれば『*Easy Introduction of True Doctrine*』の名で6000部寧波の印刷所で製本されている。

1856年の年報では『真理易知』(easy introduction of Christianity, 2<sup>nd</sup> edition) が9000部寧波の印刷所で製本されている。1857年には『*Tract- An Easy Introduction of True Doctrine*』という記載で20000部製本されている。1859年発行の22番目の年報では、『*Easy Introduction of True Knowledge*』20000部、1861年発行の24番目の年報では、『*Easy Introduction of Christian Doctrine*』という記載で10000部製本されている。この年に上海に印刷部門が移転している。

こうして年報で記載されている冊子数だけでも数万の単位で大量に配布されていた。その一部が、海を越えて長崎や横浜から宣教師等を通じて国内に流入してきていたと考えられる。

マカルティーの伝記の中でも『真理易知』については以下のように記されている。<sup>21)</sup>

The one which he hoped the most from was the “Easy Introduction to Christian Doctrine.” It had a very extensive circulation in China, where it has gone through a great many (25 or 30) editions, and is still standard tract. It has also been translated into the Korean language, where the missionaries sell their tracts. Dr. and Mrs. Hepburn executed a version of it in Japanese, and had it copied in manuscript in the “Majiri,” or mixed Japanese and Chinese characters.

## 9. 伝道小冊子『真理易知』<sup>22)</sup>

『真理易知』は、聖書の主だった教えを11章に分け、各章最初に「聖書云」という始まりで教義をわかりやすく説明している。下に示すものは1867年上海美華書館発行のものである。実物は、16×11.7cmの小冊子であ

る。

新島襄が始めて手にした漢訳聖書抜粋と考える最初の理由は、最初は寧波のちに上海で発行されているものであること。2番目には天地創造があげられる。創世記から始まる伝道小冊子は少ない。実際『真理易知』の最初の章は、創世記1.1の天地創造であり、「聖書云神元始造天地」で始まる。



以下『真理易知』全11章の聖書云以下の文章と旧約新約聖書よりの抜粋したと思われる部位を示す。

2章「聖書云神乃靈」(ヨハネ伝4.24)

3章「聖書云神独一無也」(第1テモテ書第2章5)

4章「聖書云神造萬國之人本由一脈」(使徒行伝17.26)

5章「聖書云人之命一次死死後審判」(ヘブル人への手紙9.27)

6章「聖書云惡人将被趕入地獄並彼忘却神之諸国」(ペテロの手紙Ⅱ2.4)

7章「聖書云無人行義連一人俱無焉」(ロマ書3.10)

8章「聖書云獄吏戰慄曰先生我当何爲可得救日当信耶蘇基督爾與爾家可得救矣」

(使徒行伝16.30-31)

9章「聖書云蓋神如此愛世俾以独生之子賜世致信者免陷沈淪乃得永生」

(ヨハネ伝3.16)

10章「聖書云爾凡劳苦負重者就我  
我将賜爾安」(マタイ伝11.28)

11章「聖書云如我等負至大之救恩  
則何能逃免又日離爾惡道爲何  
偏尋死路」

(ヘブル書2.3) となっている。

三つ目の根拠としては、「天父」



の発見がある。これは“My Younger Days”の中で、神が「天父」とも呼ばれていることを知り、神に対していっそう畏敬の念を持つようになったとされている。原文では以下の通り記載されている。

I discovered in the same History his other name was the ‘Heavenly Father,’

Which created in me more reverence towards Him, because I thought He was more to me than a mere Creator of the world.

『真理易知』4章では、真神は「天父」という記載がでてくる。

「此聖書中所以呼真神爲天父 教人宜全心孝敬真神以爲我等之天父」

(ヘボン日本語訳 これ聖書の中に真神を天父ととなへ、人たるものはかならずこの神に孝敬をつくし、またおのれのごとく人を愛して四海のうちみな兄弟となるべきことを教へたまえるなり。)である。

以下原著の後ろより2.3行目部分に「天父」という記載が見える。



## 10. 『真理易知』 第9章のヨハネ伝3章16節

四つ目の根拠として『真理易知』の第9章は、ヨハネ伝3章16節であることが挙げられる。これは新島襄自身が「聖書の中の太陽」と称賛する聖句である。

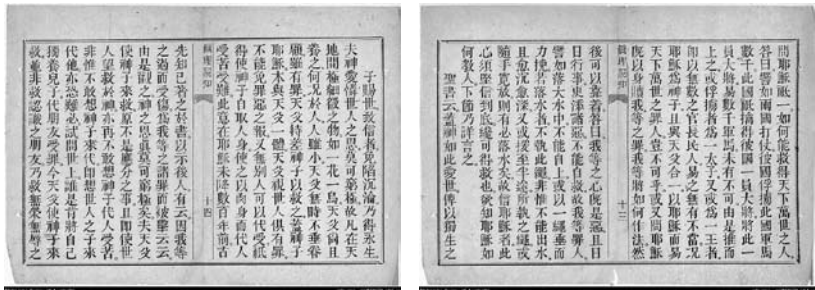
1866年、函館の福士にあてたとされる手紙にも引用され、またアンドーヴァー校時代日記帳の折り返しにもこの聖句を書き付けている。1874年のレキシントン説教の冒頭でもこの一節を引用している。

「聖書云、蓋神如此愛世俾以独生之子賜世、致信者、免陷沈淪、乃得永生。」(ヘボン日本語版 聖書に云く、それ神はひとり生し子をもって世にたまへり。すべてこれを信ずるものはほろびずして、永生をうく。その世を

いつくしみたまふことかくの如し)

ホランドの手紙では、中国本の1冊に感銘をうけ、特にこの文に希望を感じたと述べている。従来新島襄とヨハネ伝3章16節との出会いは、ボストンへの航海中、香港で刀と引き換えに手に入れた新約聖書を読みすすめる過程でおこったとされている。マタイ伝から始めて、マルコ、ルカと読む進め、この文章に出会ったというものであった。これは、デービスの伝記「新島襄の生涯」の中でデービスが新島から伝え聞いた話として出てきている。これこそがまさに自分が欲していた救い主であると感じたという。

今回の検索では、『真理易知』の第9章ならびに1868年のホランドの家族に当てた手紙の内容から判断すれば、ヨハネ伝3章16節は、すでに江戸にいらる所に新島の目に触れていた可能性が高いと考えられる。新島が日本に帰国以後にデービスが聞いたことと、アーモスト大学で1868年当時、寄宿舎で新島と同室であったホランドの手紙のどちらに信憑性の重点をおくかによって解釈が異なってくるが、ホランドの手紙の記述を参考にしたい。以下『真理易知』の該当部分を提示する。1枚目の最後の行から第9章は始まっている。この章にも「天父」という語句は散見される。



## 11. まとめ

新島襄（当時 新島七五三太）が友人から借りて読んだ1冊の漢訳聖書



抜粋は、Divie Bethune McCartee (麦嘉締 1820-1900) が1853年寧波、1862年上海で出版した伝道用小冊子(トラクト)『真理易知』(Easy Introduction to Christian Doctrine)であったと考えられる。当時キリスト教関連の漢籍書籍を数冊程度は目にしていたと思われるが、その中の1冊に『真理易知』があったことは間違いないことのように考えられた。この本の中で、天地創造の話や天父を発見し国外への関心が高まっていった。

また、ヨハネ伝3章16節との出会いは、ボストンに向けての航海中ではなくすでに江戸において読んだ『真理易知』で出会っていた可能性もあると考えられた。

## 参考文献

- 1) E.C.Bridgman 大美聯邦志略(墨海書館、1861年)  
(<http://nla.gov.au/nla.gen-vn351522> 国立オーストラリア図書館のデジタルコレクション)
- 2) 新島襄の持病「リウマチズム」について(抄録)  
布施田 哲也 日本医史学雑誌 第57巻2号 p.177
- 3) 新島襄全集 2宗教編(同朋舎、1983年)、p.416
- 4) Phebe Fuller Mckeen, *Upright against God - A sketch of the early life of Joseph Hardy Neesima* Boston, D. Lorthrop Company.1890
- 5) “津田仙氏の信仰経歴談”『護教』344号(1898年2月26日)
- 6) 小澤三郎『幕末明治耶蘇教史研究』(亜細亜書房、1944年)
- 7) 常盤大定編『明治仏教全集』第八巻護法編(春陽堂、1935年)
- 8) 岡部一興編『ヘボン在日書簡全集』(教文館、2009年)、p.66,68
- 9) 高谷道男編『S. R. ブラウン書簡集』(日本基督教団出版局、1965年)、p.52
- 10) George Smith, *Ten Weeks in Japan* (Longman,Green,Longman,and Roberts 1861), p.426
- 11) “The Opening of China” *The Missionary Magazine*, 1859.Vol.39,8; p.289
- 12) 『現代語で読む新島襄』(丸善書店、2000年)、p.53-54 p.17
- 13) “The Bible for the Unevangelized” *The Missionary Herald*, 1868. Vol. 64, 10;

p.289-292

- 14) 北垣宗治『新島襄とアーモスト大学』（山口書店、1993年）P.253
- 15) “Rev. Joseph Neesima” *The Missionary Herald*, 1874, Vol. 70, 12; p. 381-385
- 16) William M Taylor, *David, King of Israel* (Harper & Brothers, 1875) p. 128
- 17) 「祈祷文」新島襄遺品庫 目録番号1214 1865.10.12
- 18) *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese*  
American Presbyterian mission press 1867
- 19) Robert kennaway Douglas, *Catalogue of Chinese Printed Books, Manuscripts and Drawings in the Library of the British Museum* Longmans & Co. 1877
- 20) 吉田寅『中国プロテスタント伝道史研究』（汲古書院、1997年）p. 523-545
- 21) Robert E. SPEER, *A Missionary Pioneer in the Far East. A Memorial of Divie Bethune McCartee* (Fleming H. Revell Company, 1922)
- 22) Divie Bethune McCartee, 『真理易知』（上海美華書館、1867年）(<http://nla.gov.au/nla.gen-vn318879> 国立オーストラリア図書館)